



宮田 太一 しめたる、いちじる。1964年大阪市立高専卒業。日本大蔵省の研修官として佐川急便に5年間勤務後、28歳で藍トラックから引起した運営を始める。以後、日本の「ひここしまさん」のリサイクルショップを開業。2002年に日本初の通品整理専門会社「キーパース」を立ち、通品整理業をビジネスモデルとして確立させることでマスコミから注目を浴び、現在でも取材の申し込みは毎日も切らがない。創業からの約1万件以上の実績から、最近では本業意外に「独立死」を中心とした講演や組合としてDVDの作成権を譲り、著書に「遺品整理屋は見た!」「孤独死、あなたはお父ですか?」(ともに扶桑社)、「おひとりさま」(文藝春秋)、「孤高の人生」(文藝春秋)など。

ますが、そうではありません。縁はいまもあるし、気持ちもある。ただ助け合つたりがないから。「無援社会」ではあるのもしません。それに対して、高齢者が自分たちの子ども世代を要するとしているケースが多いように感じます。戦後、現在の社会や生活スタイルを立ててしまったのは、六十代や七十代の方々ではないでしょうか。戦前の地縁・血縁に縛られた社会が旧弊な「ムラ社会」だとして日本中に都市化が進み、地縁・血縁をどんどん切り離してしまった側面があることは否めません。自分たちが手かせ、足かせと思つてはいるだけの話かもしれません。時代の流れで孤立しているわけですが、「もう、とかこのまま平穡な人生を終えたこれまで構わない」と思つていても、らっしゃる方多いですね。

また、高齢者で孤立している人は、人が付き合つて話を聞いているから孤立しているだけの話かもしれません。時代の流れで孤立しているわけですが、「もう、とかこのまま平穡な人生を終えたこれまで構わない」と思つていても、らっしゃる方多いですね。

さらに、本当は六十年代くらいで死ぬとよがつたなどとは言えません。地縁・血

縁にがんじがらめになつて、いた戦前の社会は、いまよりもずっと今戻を強いたれど、それが、そのままで生きるのは思つてはいなかったので、生活できないお金を持つなければ生きできない不安な状況も生まれる。いまの六十代、七十年代は、現在のようなしがらみの薄い社会を築き上げてきて、「いやややり残り少ない人生で、何とかこのまま平穡な人生を終えたこれまで構わない」と思つていても、どうはないでしょうか。

ですから、お金を持つている世代なのだ

けれど、掘つて離さうとしません。そう

かしません。そして、そうなつてしまふことを諦めてしまつて、いる人といえる

ことを諦めてしまつて、いる人といえる

ことを諦めてしまつて、いる人といえる